

IV. まとめ

1. 平城京と宮の庭園遺跡

第126次庭園遺構

今回園池を検出した地域は、平城宮北方・大蔵省推定地で『続日本紀』に天皇が大蔵省で相撲を御覧になる記事や、この北に接する松林宮に曲水宴を行なう記事がみられることにより儀式・宴遊の施設が存在したことが推測される。園池の遺跡はその一部を検出したに過ぎないが、園池の規模は、市庭古墳外堤部を利用し、外堤の幅18mで蛇行して西南へ伸びる。外堤部の葺石は内側（墳丘側）だけ、径7.8cmの礫で30°の勾配で葺かれているが、この葺石を利用して5°の緩勾配に敷き並べて蛇行した洲浜を形成している。池底は粘土質の地山で、所々に上部は削平されているが高まりがみられ、中島・出島を形成していたものと思われる。今回の検出範囲では景石はみられなかったが、洲浜石敷が外堤の内側だけにみ存在することより、外側に建物が建ち、外から墳丘部を背景にした庭園の鑑賞を行なう構想が計られたものかと思われる。園池は丘陵部に位置するため、自然の水系による給水は困難で、園池への給水のため井戸S E2163が掘削されている。水深は井戸・池底・洲浜石敷から判断して、60cm位の浅い池で、池底の水勾配から水は東北から南西へ流れている。池内の堆積は赤色粘土が30cm堆積しているに過ぎず、池底に水を使用したと考えられる有機質・腐植土層の堆積はみられず、常時は滞水していなかったものと思われる。

園池S G 2162は、1969年度に24号線バイパス路線の事前調査で行なった第56次調査（平城京左京一条三坊十五・十六坪）で検出した園池S G 520と立地意匠の上で共通点を持つ。即ち平城京造営に際し、前代の古墳の墳丘の削平、濠の埋め立てだけでなく、56次では前方部の濠の一部を、126次では後円部の外堤の一部をそれぞれ利用して園池を造成している(fig. 21・22)。また古墳の葺石の28°の勾配を3°の緩勾配に並べかえて園池の洲浜石敷を形成している。

園池の岸边に礫を並べて蛇行した緩勾配の洲浜を形成する手法は藤原宮で発掘された園池（第2次・4次調査）にその意匠がみえる。^註

古墳葺石を園池の洲浜に利用する形が2例検出され、かなり古くから園池に洲浜を形成する意匠が存在したことと、石積等土木造園技術に於て、前代との共通性の存在が予想される。

註『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅰ』（奈良国立文化財研究所学報27冊）1976

『飛鳥・藤原宮発掘調査概報2』1972

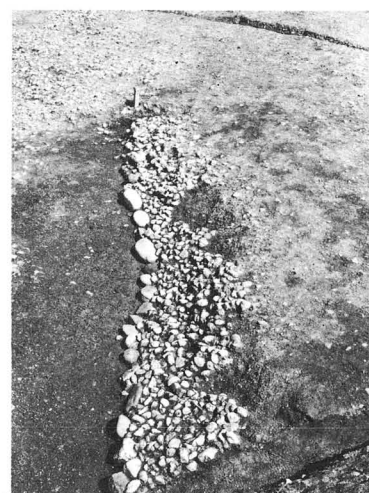
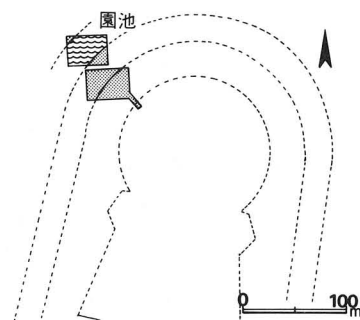


fig. 21 第126次調査SG2162

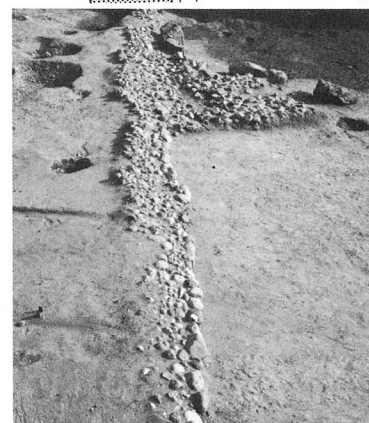
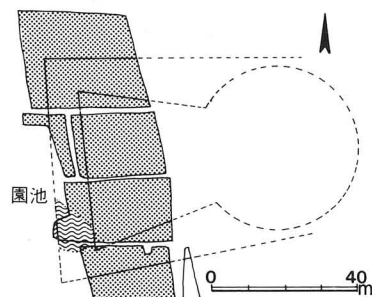


fig. 22 第56次調査SG520

平城京と宮の園池

従来、平城京の園池は『万葉集』『懷風藻』にみられる藤原不比等・宇合・麻呂、長尾王などの邸宅の園池の描写より、また宮内の園池は『続日本紀』にみられる松林苑・西池宮・南苑などの記事より往時の姿を推測していたにすぎない。近年の発掘調査の成果により平城京・宮の園池の全容もしくは一部が、今回の調査を含んで9ヶ所検出され、日本庭園史解明の上で貴重な資料を提供している。検出された9ヶ所の園池を検討してみると立地・意匠の上でいくつかの共通点がみられる。立地の問題では、地形的に山麓部に位置するものは水源として湧泉を利用する形（表2右図A）や、谷筋に位置し堤を造成して溜池にする形態（B）をとる。平地部に於ては湿地・旧河床（G・H）や前代の古墳の周濠を利用する形（D・E）と新たに池を穿つ（C・F・I）の2つに分類できる。また庭園意匠の上で、水源が主に浅い谷筋の河川に由来するため、いずれも50cm未満の浅い池であること、また緩やかな3～10°の勾配を持つ蛇行した汀線・洲浜石敷を持つことが共通の意匠としてみられる。園池と建物の関係では、近接した位置にも建てられ鑑賞だけでなく、機能的な空間としても存在していたことなど一部ではあるが、従来未解決部分が多かった奈良時代庭園史を解明する手掛りを得た。

表2 平城京と宮の園池

名 称	位 置	発 掘 調 査	規 模 形 状	意 匠	現 況	報 告 書 等
A. 伝称徳天皇御山荘跡 （平城京西四坊北辺）	西大寺奥院北西 200m 西の京丘陵の北端 溪流状の地形	1979年 第118-2・20次 調査 東岸・南岸の一部を検出	南北18m、東西55m 水深約20cm ヒョウタン形 1,160㎡	中島、北西隅に湧泉 護岸は地山の掘り込み。	溜池	『昭和54年度平城宮跡 発掘調査概報』
B. 佐紀池	平城宮内・奈良山丘陵 の谷筋	1975年 第92次調査-西 南池尻 1976年-第101次 調査、北側東西岸一部検 出	南北150m、東西160 m、形状は現況に類 似、水深50cm。 16,500㎡	岸辺10°の緩勾配で 挙大石敷の巾2mの 洲浜	用水池 特別史跡	『奈良国立文化財研究 所年報』1976、1977
C. 平城宮	平城宮内大膳職地区	1960年 第4次調査-池 全容を検出	南北17m、東西18m の不規則形。最深部 の深さ80cm。150㎡	護岸は整地土の掘り 込み。東に隣接して 南北棟が建つ。	特別史跡 整備済（池 平面表示）	『平城宮発掘調査報告 II』 1962
D. 平城宮北辺地域 （大蔵省推定地）	平城宮北辺大垣と松林 苑の間、市庭古墳後円 部北西	1980年 第126次調査- 市庭古墳の外堤の一部を 利用した園池の一部検出	南北巾16m 水深60cm	外堤の葺石を利用し て5°の勾配の巾3 mの洲浜。	分譲住宅建 設地	『本報告書』 1981
E. 平城京左京一条三坊 十五坪	不退寺（業平別邸）の 真西	1969年 第56次調査-平 塚2号墳前方部の一部を 利用した園池の東半検出	南北10m、東西20m の曲池、水深20～30 cm。150㎡	前方部の葺石利用し て3°の勾配の洲浜、 庭石6ヶ	24号バイパス 平城資 料館中庭に 移転展示	『平城宮発掘調査報告 IV』 1974
F. 法華寺	平城宮東辺	1980年 第123-4次調査 -池の一部を検出	一部（南北10m、東 西7m）	礫敷の護岸・洲浜	宅地	
G. 平城宮東院	東院東南隅、宇奈多里 神社林丘東	1967年 第44次 1976年 第99次 1978年 第110次 1979年 第120次各調査で 池の全容、付属建物検出	南北60m、東西60m 鍵の手状に複雑に屈 曲した汀線、水深40 cm。1,970㎡	初期の庭は汀線に安 山岩を敷き詰め、後 期の庭は全面玉石敷 景石・中島・橋を設 ける。	特別史跡 整備予定	『奈良国立文化財研究 所年報』 1968、1977、 1979、1980
H. 平城京左京三条二坊 六坪	東に隣接して菰川が流 れ、池は六坪の中心に 位置する。	1975年 第96次、1978年 第109次、1980年 第121 次、各調査で池の全容、 付属建物検出	南北延長55m、東西 巾15mの曲池、水深 25m。220㎡	全面石敷の池で、洲 浜、庭石を持つ。	特別史跡 整備中	『平城京左京三条二坊 六坪発掘調査概報』 1976、1980
I. 平城京左京三条一坊 十四坪	十四坪の南西端	1968年、第46次調査で西 側小路に沿った築地、門 その内側に建物、園池の 一部検出	一部（南北5m、東 西10mの円形の池、 水深25cm。	中島と径20cmの玉石 が裾部に一部残存、 庭石1ヶ。	電々公社敷 地	『奈良国立文化財研究 所年報』 1968

平城京と宮の園池

従来、平城京の園池は『万葉集』『懷風藻』にみられる藤原不比等・宇合・麻呂、長尾王などの邸宅の園池の描写より、また宮内の園池は『続日本紀』にみられる松林苑・西池宮・南苑などの記事より往時の姿を推測していたにすぎない。近年の発掘調査の成果により平城京・宮の園池の全容もしくは一部が、今回の調査を含んで9ヶ所検出され、日本庭園史解明の上で貴重な資料を提供している。検出された9ヶ所の園池を検討してみると立地・意匠の上でいくつかの共通点がみられる。立地の問題では、地形的に山麓部に位置するものは水源として湧泉を利用する形（表2右図A）や、谷筋に位置し堤を造成して溜池にする形態（B）をとる。平地部に於ては湿地・旧河床（G・H）や前代の古墳の周濠を利用する形（D・E）と新たに池を穿つ（C・F・I）の2つに分類できる。また庭園意匠の上で、水源が主に浅い谷筋の河川に由来するため、いずれも50cm未満の浅い池であること、また緩やかな3～10°の勾配を持つ蛇行した汀線・洲浜石敷を持つことが共通の意匠としてみられる。園池と建物の関係では、近接した位置にも建てられ鑑賞だけでなく、機能的な空間としても存在していたことなど一部ではあるが、従来未解決部分が多かった奈良時代庭園史を解明する手掛りを得た。

表2 平城京と宮の園池

名 称	位 置	発 掘 調 査	規 模 形 状	意 匠	現 況	報 告 書 等
A. 伝称徳天皇御山荘跡 （平城京西四坊北辺）	西大寺奥院北西 200m 西の京丘陵の北端 溪流状の地形	1979年 第118-2・20次 調査 東岸・南岸の一部を検出	南北18m、東西55m 水深約20cm ヒョウタン形 1,160㎡	中島、北西隅に湧泉 護岸は地山の掘り込み。	溜池	『昭和54年度平城宮跡 発掘調査概報』
B. 佐紀池	平城宮内・奈良山丘陵 の谷筋	1975年 第92次調査-西 南池尻 1976年-第101次 調査、北側東西岸一部検 出	南北150m、東西160 m、形状は現況に類 似、水深50cm。 16,500㎡	岸辺10°の緩勾配で 挙大石敷の巾2mの 洲浜	用水池 特別史跡	『奈良国立文化財研究 所年報』1976、1977
C. 平城宮	平城宮内大膳職地区	1960年 第4次調査-池 全容を検出	南北17m、東西18m の不規則形。最深部 の深さ80cm。150㎡	護岸は整地土の掘り 込み。東に隣接して 南北棟が建つ。	特別史跡 整備済（池 平面表示）	『平城宮発掘調査報告 II』 1962
D. 平城宮北辺地域 （大蔵省推定地）	平城宮北辺大垣と松林 苑の間、市庭古墳後円 部北西	1980年 第126次調査- 市庭古墳の外堤の一部を 利用した園池の一部検出	南北巾16m 水深60cm	外堤の葺石を利用し て5°の勾配の巾3 mの洲浜。	分譲住宅建 設地	『本報告書』 1981
E. 平城京左京一条三坊 十五坪	不退寺（業平別邸）の 真西	1969年 第56次調査-平 塚2号墳前方部の一部を 利用した園池の東半検出	南北10m、東西20m の曲池、水深20～30 cm。150㎡	前方部の葺石利用し て3°の勾配の洲浜、 庭石6ヶ	24号バイパス 平城資 料館中庭に 移転展示	『平城宮発掘調査報告 IV』 1974
F. 法華寺	平城宮東辺	1980年 第123-4次調査 -池の一部を検出	一部（南北10m、東 西7m）	礫敷の護岸・洲浜	宅地	
G. 平城宮東院	東院東南隅、宇奈多里 神社林丘東	1967年 第44次 1976年 第99次 1978年 第110次 1979年 第120次各調査で 池の全容、付属建物検出	南北60m、東西60m 鍵の手状に複雑に屈 曲した汀線、水深40 cm。1,970㎡	初期の庭は汀線に安 山岩を敷き詰め、後 期の庭は全面玉石敷 景石・中島・橋を設 ける。	特別史跡 整備予定	『奈良国立文化財研究 所年報』 1968、1977、 1979、1980
H. 平城京左京三条二坊 六坪	東に隣接して菰川が流 れ、池は六坪の中心に 位置する。	1975年 第96次、1978年 第109次、1980年 第121 次、各調査で池の全容、 付属建物検出	南北延長55m、東西 巾15mの曲池、水深 25m。220㎡	全面石敷の池で、洲 浜、庭石を持つ。	特別史跡 整備中	『平城京左京三条二坊 六坪発掘調査概報』 1976、1980
I. 平城京左京三条一坊 十四坪	十四坪の南西端	1968年、第46次調査で西 側小路に沿った築地、門 その内側に建物、園池の 一部検出	一部（南北5m、東 西10mの円形の池、 水深25cm。	中島と径20cmの玉石 が裾部に一部残存、 庭石1ヶ。	電々公社敷 地	『奈良国立文化財研究 所年報』 1968



fig.23 平城京と宮の園池遺跡 (A～Iのアルファベットが検出地点)

